

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：34317

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K12840

研究課題名(和文) フランス精神分析における「享楽」の概念の再検討、およびその思想的位置づけの試み

研究課題名(英文) Reconsideration of the concept of "enjoyment" in French psychoanalysis and an attempt to situate it within its philosophical framework.

研究代表者

春木 奈美子 (HARUKI, NAMIKO)

京都精華大学・共通教育機構・研究員

研究者番号：60726602

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、フランスの精神分析家ジャック・ラカンが示唆的な言及を残しつつも、それについて系統立てて論じること、症例を収集することもなかった「前エディプスの母娘関係」とそれが「女性のセクシュアリティ」に及ぼす影響を解明しようとするものである。そうした作業を通じて、ラカンによって導入された「享楽」の概念を再検討し、最終的には思想史の中に明確に位置付けていくことを目指した。手続きとしては、作家マルグリット・デュラスや、精神分析家フランソワーズ・ドルトの女性性にまつわる思想を吟味しつつ、実際の症例を検討することで、臨床的応用を見据えた考察を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

This research has elucidated the clinical scope of discourse concerning Lacan's concept of femininity, which has previously lacked clarity. From the practice in French psychiatric hospital, valuable insights were gained for potential applications in clinical practice in Japan.

研究成果の概要(英文)：This research aims to elucidate the "pre-Oedipal mother-daughter relationship" and its impact on "female sexuality," which was suggested by the French psychoanalyst Jacques Lacan in a suggestive manner but not systematically discussed or supported by case studies. Through such work, it seeks to reexamine the concept of "enjoyment" introduced by Lacan and ultimately establish its clear position within the history of ideas. By examining the thoughts on femininity by writer Marguerite Duras and psychoanalyst F. Dolto, while considering actual case studies, it was possible to conduct a thoughtful analysis with a focus on potential clinical applications.

研究分野：Psychoanalysis

キーワード：Femininity French psychoanalysis

1. 研究開始当初の背景

研究者はこれまで語りの構造を出発点とし、主にラカン後期の概念である「症状(サントーム)」について、命名論および個体化の理論との関係の中で考察を重ねてきた(特別研究員 RPD (H 28-31)『個と普遍の交わる場所 症状 概念からの西洋思想史への寄与』、特別研究員 PD (H 25-28)『西洋思想における「症状としての言語」の系譜』、海外特別研究員 (H 23-25)『名指しと症状の概念史へのフランス精神分析的寄与』)。そのように考察を進めれば進めるほど、ラカンの後期思想の中に一片の、しかし重要な欠落が見えてきた。女性のセクシュアリティの核心にある「女の享楽」の問題系である。

これまで「女の享楽」は、せいぜい「ファルス享楽」にプラスされるものとして「言語を越えたもの」と形容されるに留まるか、狂気として切り捨てられるかであった。このように「女の享楽」の検討は思想的にも臨床的にも不十分であり、その内実をラカン自身もラカン研究者も未だ明確にはできていないことを痛感した(春木奈美子『現実的なものの歓待—分析的経験のためのパッサージュ』創元社、2015年)。これが着想に至った経緯である。

簡潔にまとめれば、享楽とは、欲望や快樂という水準だけでは説明できない人間存在の不思議さを解明しうる極めて重要な概念である。ただこの概念を導入した精神分析家ジャック・ラカンの後期の思想においても、「女性のセクシュアリティ」とりわけその核である「女の享楽」は、ひとつのアポリアとなっている。このアポリアをめぐる本研究は計画された。

2. 研究の目的

プレエディプス期の母娘関係の困難が、成人した娘のセクシュアリティに強烈な影響を与えたケースにおいて、分析治療が大変な困難に陥ることを最初に明示し、「これからの精神分析の課題」としたのは、ラカンのスーパーヴァイズを受けた女性分析医 Jenny Aubry (*Enfance Abandonnée* (1983)) である。Aubry 曰く、プレエディプスが問題となる女兒のケースでは、言語による分節化を通して、比較的早期に快方に向かうが(英国で活躍した精神分析家メラニー・クラインによるケースも同様だ)しかし成人女性患者となると、治療は困難を極める。こうした惨禍を收拾するために、フロイトや前期ラカンとともに「父の機能(ファルスの法)」にしたがえばよい、とはとても言えないのである。

研究者自身も、成人女性との臨床において、叫びと嗚咽が支配するまさに「荒れすさみ」といえるような壮絶な事態に直面し、母娘関係の深く重い地平を知った(春木奈美子「彼岸の女たち—マルグリット・デュラスの方へ」『I.R.S.—ジャック・ラカン研究』日本ラカン協会、18号、pp.2-25、2019年)。また、フランスでは、プレエディプス期に注目しながら自らの臨床活動をみていこうとするラカン派の女性分析家が出てきた(R-P Vinciguerra, *Femmes Lacaniennes* (2014) etc.)。以上から共通して見えてくるのは、既存のラカンの枠組から論じる限界と、女性分析家による臨床の理論化の必要性である。

そこで本研究は、ラカンが積み残した問いである「プレ(前)エディプス期の母娘関係が、後の娘の享楽に与える影響」を解明することを通じて、ラカンが最後まで辿り着くことのなかった「女の享楽」の深奥を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

これまで一貫して採用してきた研究方法ではあるが、本研究ではよりラディカルに思想と臨床の両側から研究を進めることにした。

まず考察の導きの糸となるのは、ラカンに「衝撃」を与えた二人の女、すなわち作家マルグリット・デュラスと、精神分析家フランソワーズ・ドルトである。本研究は、ともに娘時代に母との壮絶な関係を体験してきたこの二人の、女性のセクシュアリティをめぐる思想および実践を徹底して分析することを通して、後期ラカンの晦渋な思想にこれまで見えてこなかったひとつの一貫性を浮かび上がらせることができると仮定し、この仮説を証明することによって、ラカンによって導入された「享楽」という概念を思想史の中に位置づけるとともに、人間存在そのものの抜き差しならぬ運命として明確に規定することを目指した。

次に実践面では、臨床家としての側面を活かし、フランスの精神科病院ラボルド・クリニックの治療実践に参加しながらの調査を実施した。ラカンの精神分析理論を実装し、今でもおおくの哲学者たちの訪問が絶えないこの精神科病院拠点として長期研究を実施し、症例収集に努めるとともに、女性性に関して実際の臨床において応用可能な提言が行うことを目指した。

4. 研究成果

上に述べたように、考察の対象であると同時に導きの糸となるのが、作家マルグリット・デュラスと、精神分析家フランソワーズ・ドルトであった。この二人の選出は、決して恣意的なものではない。性や享楽を論じるに、マテームや論理式など（ファルス以外の）の後期の理論的道具立てを待たねばならないラカンに、はやい段階から「衝撃」を与えていた人物こそ、この二人の女性なのである。

たとえば女性の狂気の表出を描いたともいえるデュラスの小説『ロル・V・シュタインの歓喜』（1964）を読んだラカンは、その興奮を隠すことなく、デュラスを真夜中のカフェに呼び出した。ラカンが二時間近くまくし立てる間、デュラスはほとんど黙っていたという。「ラカンなしにラカンの教えを知った」という、ラカンからデュラスへの「贅辞」については、65年の論文にうかがえる。

一方、ドルトに関しては、1960年のアムステルダム会議での「女性のセクシュアリティ」についての講演を思い出す必要がある。フロイト以外の参照を行わず、生理学の用語を織り交ぜ、自らの臨床経験から赤裸々に語るドルトを前に、会場は静まりかえった。そんな中、唯一の応答がラカンの発したたった一言「大胆にも言ってくれたな *culottée*」であった。

前期ラカンに「ファルス」なしに性を考えることを教えたこれら二人の女たちについては、ラカン研究者の誰もがその名を知るところであるが、これまで彼女たちの「思想」が、ラカンとの関係の中で本格的に取り上げられることはなかった。しかし本研究は、この二人の思想および、それと解きがたく結ばれた実践、すなわちマルグリット・デュラスのエクリチュール（書くこと）とフランソワーズ・ドルトのアナリイズ（精神分析）そのものに分け入り、精緻に検討していくことで、デュラスとドルト、それぞれの思想・実践の再検討・再評価を行うことができた。

デュラスに関しては、文学・演劇・映画研究の分野でこれまで長く論じられた歴史があり、申請者自身も何度か論じてきたが（'Ab-sense of existence'（2012）etc.）、未だラカン理論からの読解に留まっていた。今回は、デュラスの作品だけでなく、彼女の「書く」という行為自体を考察の対象とした。特に「言語を沈黙に近づける」デュラス独特のエクリチュールからは、ラカンの弱点でもあるプレエディプス期の地平（シニフィアン導入以前のこの地平を理想郷と考えるのは、エディプス期からみた「幻想」にすぎず、実際にはそこは生きるに耐えない混沌である）を取り出すことができた。

まとめれば、「絶望に心を奪われ、子に全く構わなかった」という実母との壮絶な関係がデュラスの文学活動や女性観に与えた影響を考慮しつつ、性と死が独特に描かれた彼女の作品群（対談、三面記事、手稿を含む）を考察していくなかで、「パロール以前の沈黙」、何もものにも還元されない「無活力の力」等が、デュラスが女性性の基準としてなっていることを明らかにした。

ドルトに関しては、フランス国内において臨床家として揺るぎない評価を受けていながらも、これまで思想的考察の対象からは除外されてきた。しかし彼女は、豊富な臨床に裏付けられた鋭い直観と洞察を残している。また、先の60年の会議において、70年代ラカンのテーゼ「女は存在しない」を先取っていることに鑑みれば、読み手に恵まれてこなかったと言えるだろう。実際、生理学と臨床体験を軽々と行き来するドルトの語りから、享楽と不可分の身体的出来事を剥き出しの状態に取り出すことができる。さらにその豊かな臨床的記述から女性のセクシュアリティについての理論を再構築する可能性が示唆された。

まとめれば、典型的なブルジョア家庭に育った実母との深い確執も考慮しつつ、その他の彼女がみてきた女性症例を参照しながら、性交における女の「完全な参与」、「何者でもなくなること」等が、ドルトにとっての女性のセクシュアリティに関する鍵概念となっていることを明らかにした。

続いて、ラポルド・クリニックにおける長期滞在研究では、その独特な環境から当初予測していた以上の示唆を得ることができた一方で、未だじゅうぶんに汲み尽くせていない部分も多い。特に症例に関しては、まだ進行中のものがほとんどであり、現時点ではその詳述は控えねばならない。他のテーマに通じる知見については、今後の研究に引き継いでいきたい。

いずれにしても、時に患者・治療者の序列を排して独特に展開する病院環境には、日本の臨床に一石を投じうるようなヒントに溢れている。そこで今後も、何よりも滞在者たちのペースに沿って、その力動をより明確に捉えていくために、引き続きラポルド・クリニックでの活動を継続していくこととした。そのようにして、今回の研究を発展的に継続することで、ひいては日本の臨床に直接寄与できるような成果を引き出したい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------